

第 2 部 交流分科会

第 2 分科会

第2分科会：「都市・農村交流への牧野の活用とルールづくり」

環境学習提供者から見た阿蘇と草原利用への期待

財団法人全国修学旅行研究協会 本部部長
山本精五

プロフィール

1951年（昭和26年）3月 新潟県生れ 52歳
現在は、埼玉県さいたま市に在住。

社歴

1970年（昭和45年）11月 近畿日本ツーリスト(株) 入社
埼玉教育旅行支店 勤務
営業及び手配業務を経験
1993年（平成5年）7月 京都仕入センター 所長
1994年（平成6年）1月 関東営業本部 教育旅行営業部 課長
1998年（平成10年）1月 本社 企画室 教育旅行担当課長
2003年（平成15年）1月 （財）全国修学旅行研究協会に出向 本部 部長

発言要旨

当協会は、7年前より学校の修学旅行及び校外学習を対象に「環境学習旅行」を提案してまいりました。近年、各地で環境に対する種々の課題が提起されており、教育界においても環境教育の重要性が叫ばれ、学校行事としての修学旅行・校外学習等においても取り組みが始まっております。

一般的に、環境に関わる旅行は「エコツアー」と呼ばれていますが、当協会は、教育旅行においては「環境学習旅行」と総称し、修学旅行はもとより校外学習の素材開発を、関係協力団体・機関の応援をいただき、積極的に進めております。

1. 学校教育における環境学習の必要性（目的）

- ・ 環境が人間に与えるプラス面・マイナス面を学ばせる。
- ・ 環境に対する理解に立って、環境保全に配慮した望ましい働きかけのできる技能や思考力・判断力を身につけさせる。
- ・ 自然に親しみ、自然の仕組みを理解させる。
- ・ 環境保護・地球環境問題・エネルギー問題について考えさせる。
- ・ スポーツ等を通じて自然と親しみ、自然の大切さを体感させる。
- ・ 自然・風土が育んだ生活文化を体験させる。

- ・ 歴史の中で生まれた文化遺産について学ばせる。
- ・ 地域に伝わる伝統的・エコロジカルな生活文化を体験させる。

2. 環境学習の一環としての旅行的行事の取り組み

- ・ 修学旅行・移動教室等を「環境学習旅行」と意義付ける。
- ・ 周遊・観光型 体験・滞在型への変化に対応する。
- ・ より自然に触れながら環境を理解し、保全に努める行動を展開する。
- ・ 体験、講話、見学、交流、奉仕等を通じて「環境」を学習する。
- ・ 学習目的のテーマを明確にし、学習効果を高める。
- ・ グループ別学習を展開し、個々の学習課題を明確にする。
- ・ 「学び」の中に「楽しさ」「思い出」を盛り込む。
- ・ 所要時間は半日、又は1日コースとする。

3. 「環境学習旅行」プログラムの開発

(1) 「環境学習旅行」の情報収集。全国の学習素材のデータベース化を図る。

(2) プログラム化

事前学習ガイダンス・実体験学習・事後のまとめを入れた「学習プログラム」として開発する。

(3) 学校向けパンフレットの作成

「環境学習旅行」総合パンフレット A4版 8ページ

- ・ 当協会の提案する「環境学習旅行」の概要
- ・ 「環境学習旅行」の特徴・分類
- ・ 「環境学習旅行」の企画から実施まで
- ・ モデル的「環境学習旅行」実施事例

「環境学習旅行」地域別パンフレット・プログラムの作成

A4版 冊子、及び、個々のプログラム詳細 B4版各1ページ

- ・ 各地域毎のプログラムを掲載
- ・ 地域のオリジナル性の高い企画
- ・ 着地型プログラム
- ・ プログラム、イラスト、写真、企画のポイント等で構成

(4) 現在までの作成地域とプログラム

「環境学習旅行」の学習に適した地域を特定して、その地域の方々と協力して作成。

現在、全国28の地域で185プログラムを作成

4. 阿蘇の牧野を利用したプログラム・各種の提案

(1) 1998年12月「環境学習旅行・阿蘇」全6プログラムを作成した。

(2) 従来の草千里、火口見学から、世界有数のカルデラである阿蘇を実感してもらうため、阿蘇全体をフィールドとしたネイチャースポーツ、自然観察、農牧業体験、湧水の仕組

等を取り入れた体験プログラムを提案し、ネイチャーセンター設立や農家民宿と連動。
(3) 日本有数の「阿蘇の草原」も検討したが諸事情により作成に至らなかった。

5. 今後の課題

- (1) 体験プログラムを作成する上で、(観光業界以外の)地域の人々との連携や協力がどの程度まで可能なのかによって内容は大きく変わる。
- (2) 「ほんもの」体験が求められ、また、時間の制約がある中、体験場所・受入人数・インストラクター・用具の提供など、総合的な受入態勢が必要である。
- (3) 班別や少人数での実施が多い体験活動にあって、申し込みや打合せの煩雑さから、受入窓口の一元化が双方から求められている。(他地区ではNPO法人、有限・株式会社等を設立し、解決策が試みられている。)
- (4) 雨天対策、救急対策、保険などの最小限の安全管理が必要である。
- (5) 阿蘇や他地区で、学校用に作成した体験プログラムが、家族旅行、グループ旅行、企業自治体の研修等の目的で、同じ内容の体験希望が増えている。

(以 上)

牧野活用のための条件～「全国エコツーリズム大会 in 阿蘇」におけるトレッキングコース設定の事例から

阿蘇町ホタルの会 会長
湯浅陸雄

プロフィール

阿蘇地域活牧野性化センター前活性化マネージャー。現在は、環境省国立公園指導員、国立公園パークボランティア指導員、熊本県ふる里水と土指導員、熊本県溪流審議委員、阿蘇町自然環境審議委員、阿蘇町町史編纂委員、財団法人阿蘇グリーンストック監事、自然案内人協会会員等を務める。

発言要旨

- ・ 牧野は人の感動を生む場～押戸石山とマゼノ溪谷～
- ・ 牧野利用への地元の意向～エコツーリズム大会 in 阿蘇での受け入れにあたって～
- ・ 牧野利用の条件とは
 - 牧野組合が立ち入りを許可する
 - 利用者は立ち入る際のルールを守る
 - ◇ 牧野の入口の柵をきちんと開け閉めすること。
 - ◇ 放牧している牧野内に車を乗り入れないこと。
 - ◇ ビン・カンなどの投げ捨てはしないこと。
 - ◇ 湿地には、踏み込まないこと。
 - ◇ 牧野内に自生している植物は、採取しないこと。
 - 組合に対しメリットがもたらされる

(参考-1) 秘境阿蘇南小国マゼノ溪谷と長者川押戸山を歩く～

212号線を登り大観峰下の原野空間へ

- ・ 阿蘇はな阿蘇美に集まり、坂元英俊デザインセンター事務局長、湯浅陸雄は、212号線を登る。
- ・ 途中212号線の杉、檜の林を眺め終戦後国が拡大造林を普及して原野を山林に変換して人工林を植えた。
- ・ 当初は人工林の手入れも出来ていたが、木材の大幅な輸入国内木材の価格の低下更に農家の高齢化後継者不足等で山の管理が不足し、荒れ山となり、一部では崩落の恐れのある山も見受けられる。
- ・ この様な事を踏まえ、212号線の道下の全面的に阿蘇の風景が見える森林を伐採する事において、景観も良く観光にも大きく役立つ事が必要等と話しながら、大観峰下の原野空間に出る。

- ・ このような空間が昔の姿だったが、今はもう見られない環境に成っている。どうしても見晴らしの良い展望を作りたいのが、願望である。

大観峰の峠を越え、南小国に

- ・ 大観峰の峠を越え、南小国に入る、役場の近くから左折して川沿いの静かな人家が点在している地域を通り、昼食の目的地に着く。
- ・ 古い民家であるが、しっかりした旧家であり格式の高い作りである。料理も素晴らしいもので、特別と言うべきものではないが、それぞれに工夫され一味違う物があった。昼食を済まし南小国の湯田公民館前には、牧野組合の方が出迎えて下さる。

いよいよ長者川マゼノ溪谷へ

- ・ 長者川マゼノ溪谷までには、葉祥明さんの描かれたメルヘンの世界が眼下に広がり雄大であり別世界に来ているようである。雨の時には川に変化する沈み橋の溪谷で停車して木々の生い茂る溪谷を歩く。9万年前に阿蘇が噴火した折に出来た岩盤の溪谷が永遠と続く。
- ・ 巨大な岩が重なり清水が岩肌を伝う。青み切る深い淵もある。突然に空間の開けた場所に出る、空を突くような大木が聳え立っている。「木の名前さえ」わからない、異様にも思える大木である。巨石には「岩チシャ」岩タバコが付着しており、人の手が加わっていない証である。

大きく開けた空間、マゼノ溪谷と、長者川の合流地点に出る

- ・ 約1時間も溪谷内を歩いたであろうか、野鳥キツツキの穴が枯木の梢にある。又苔むす大木の先端にはシダ類が付着生息している、正に大自然である。マゼノ溪谷の方に移動し上流から元の道に戻る。

車で移動して、押戸山を見学

- ・ 神が与えた巨大な遺跡だろうか。
- ・ 巨石の一つ一つに大きな感動を覚える、まさにこの巨石群自然から出来たのだろうか、疑問をもつ、至る所に人の手が加えられた様な痕跡も見られる。垂直に並んだ石群磁石が大きく波動する、古代文字がいくつかの石に刻みこまれている。それ一つにしても不思議な現象である。春彼岸秋彼岸の(御日)には東の空から昇る朝日が巨石の間から見られる角度となる、正に神秘的な現象である。
- ・ いづれにしても、神が宿る聖地である事は疑いない事である。見晴らす展望も良く、更に360度が見渡される阿蘇の草原のスローカーブが波打つ様に永遠と続く、阿蘇五岳もこの地より拝顔する事が出来る、絶好の場所でもある。
- ・ 神はこの地に大いなる力を与えパワーを宿したのであろうか。
- ・ 「力」パワーの突く山、押戸山の山頂であった。

(参考-2)

地形

- ・ 阿蘇が 30 万年前に大爆発を起し出来たカルデラ
- ・ その後 12 万年前にも大爆発が起きている。
- ・ 最後の大爆発は 9 万年前と言われている。
- ・ 阿蘇に人類が住み着いたのは、約 3 万年前、大観峰付近の長倉古墳である。
- ・ その後、村里より 1 キロ程上に上がった地点に 15000 年前の遺跡が発掘されている(波寄原古墳野付古墳)。
- ・ その結果人間は山の上から段々に里山近くに住むようになり約 3,000 年前に、阿蘇町湯浦郷にて稲刈りの石包丁が発掘された。稲作文化の始まりと推定される。
- ・ この地域には 1 千年を越えた神社が村々に 3 ケ所もある事から阿蘇での人類の発祥の地とも言われている。
- ・ 最近阿蘇一の宮象ヶ鼻古墳より 3 万年前の遺跡が発見された。それまでは、大観峰の長倉古墳が最も古い遺跡だと評価されていた。
- ・ 海拔 500m (外輪山 800m)
- ・ 年間平均気温 13 度夏涼しく冬寒い気象
- ・ 年間の雨量は 3,000 ミリ。九州で 21 の河川がある内の 6 河川をこの阿蘇から生みだしている。
筑後川(福岡)、大野川(大分)、五ヶ瀬川(宮崎)、白川(熊本)、緑川(熊本)、菊地川(熊本)
- ・ 阿蘇は農業と観光の町である。(稲作畜産林業園芸)が盛ん。

草原の維持について

- ・ 広大な草原維持は春彼岸頃の野焼きに始まる。
- ・ 野焼きの準備として、輪地切り輪地焼き(防火帯づくり)の作業がある。
防火帯：巾 10 メートル阿蘇全体の草刈の延長は 600-700 キロと言われている直線距離で、熊本から静岡までの長さを草刈した事に成る。
- ・ 野焼きは、毎年農家が公役として作業をする。大変な作業である。
- ・ 野焼きは何の為にするのか。...草原の維持、低灌木の除去草芽立ちを良くする牧場の水源維持「湿地保全」水資源確保
- ・ 毎年放牧や採草の人的営みに於いて阿蘇の原野は守られて来たものである。
- ・ 村々の上には、必ず、草の道「グラスロード」産業道が作られている。

草刈(家畜の冬期の餌)

- ・ 秋、彼岸を堺に刈干切りが始まる。この時期が「良質の牧草」の確保が出来る。
- ・ 仕事の効率化を計る為草宿をしていた「昭和 35 年頃」まで、往復 20 キロもの道程を年に 150 回程も作業で農家は牛と共に歩行していた事になる、約 3 千キロと、とてつもない距離である。先人の足腰の強いのが理解出来る。マラソンの距離にして、60 回以上にもなる。それに外輪の高低差 300 メートルを換算すると驚異的な数字となる。先人の苦労が良くわかる。
- ・ 道路網が整備されない時期までは、牛馬に頼るより運搬の手段は無かったのである。その為に、村々の上に草の道が作られ農家の産業道路として利用されていた。

みどころ

- ・ 大きな阿蘇の噴火で出来た 9 万年前の渓谷である。
- ・ 葉祥明氏の絵のごとき風景が見られる...春も又素晴らしい野焼き火を緩和する為の放牧形態が取られている。
- ・ 農家が工夫した沈み橋 / 丸い石 / 風光明媚な地点 / 春一冬までの変化 / 紅葉 / 巨石 / 桂の木 / 舟材 / 彫刻 / 音楽器材
- ・ 牛糞の清掃昆虫(ダイコクコガネツノコガネオオセンチコガネ)が産卵して甲虫類が分解して肥料として大地に還元する 自然の摂理であり、野鳥や昆虫の生態系維持に役立っている。
- ・ 春には野鳥キジ、コウジユケイ、ヤマバト類の産卵の為の栄養補給源となる「コガネムシ」の幼虫
- ・ 植物：リンドウ、ウメバチソウ、ヤマラッキョウ、キリンソウ、イワタバコジンジソウ、イワオモダカ、シノブ、セッコク等
- ・ 合流地点「一枚岩」・鳥の巣、アカゲラ、アオゲラ、コゲラ
- ・ 湧水
- ・ 押戸石-聖なる神の宿る大地-
 - ◇ 360 度の大パノラマの広がる景観であり古代遺跡
 - ◇ 鬼のお手玉石古拙文字と石の配列 4000 千年前の文字

- ◇ 人為的な構造物では、...「エジプトのピラミット」が作られた様に古代の人
- ◇ の営みの中で作られた巨石群の丘「押戸石山」
- ◇ 波打つ草原...石の配置が人為的...山に向かいて作為的に作られている。
- ◇ 春彼岸秋彼岸の頃には岩の中心より太陽が昇り来る又北東七星が巨石の真上にきらめくとされている。多くのロマンを秘めた巨石群である。

ことわざ・格言

| | |
|-------------|---------------------|
| 屋敷に植えて良い木 | 屋敷に植えない木（言葉の意味） |
| 前柿 前櫨 後栗 | 前栗（前もって使う） |
| ナンテン（難を転ずる） | ツルの木「アシタバ」（位負けする） |
| | イチヨウ 位負けする（神社仏閣にあり） |
| | 蔓の伸びる木（巻き倒す） |
| | 椿（花の首が落ちる） |
| | フジ（下がり藤と言う） |
| | ヒワ（ひ弱な事） |
| | アセビ「馬酔う木」（毒木） |
| 桃栗3年柿8年 | ゆずの馬鹿坊主 19年(実生植えの事) |
| | 榊（位負けする） |
| | ケヤキ（け焼ける） |
| | ウルチ ツタ類（被れる） |

押戸石について

- ・ 古代西セム系シュメール文字「BC2000年」ペトログラフィ協会の副会長吉田信啓氏により確認された(古代岩刻文字)
- ・ アツカドの王サルゴン一世がメソポタミアの都市国家を、殺りくを似て制覇していった事から、世界に民族の大移動をもたらし、そして海洋に逃れた。シニータル系の人々が世界に散って、ペトログラフィを残した。多くは彼らの神を顕し、安全や豊穡の祈願を石に刻んだ。
- ・ 彼らは、黒潮で北上する海洋経路で日本に渡りこの地に着いたのであろう。海洋民族には、北緯32度のオリミントと同じ経緯線上にこの熊本がある事もその対象ではなかろうか。山の高さがエルサレム周辺のレバノン山脈と似ている点この巨石の磁気異常が人々にパワーをもたらし、大地の神宇宙の神に祈り捧げたものであろう。この山の近くには水の湧きいずる地形も多く、彼らは、地球の水を守る森の番人であつたのではと、想像される。
- ・ この押戸山標高840メートルのストーンサークルの丘に着くまでにどんな経路で着いたのだろう。
- ・ 黒潮に乗り、屋久島、坊津、有明海と帆を進め筑後川をさかのぼり、日田杖立小国の押戸山に着いたと推測される。
- ・ 押戸石の最大の石は6メートルの太陽石であり、阿蘇の火口に向き磐座は古代ケルトやアツニリアの王の兜を想起させる。その石の周辺には、宇宙の神ベル「雨を我にと祈る」ペトログラフィが見られる。海洋系ケトル宇宙の神ベル地域住民は今も早越の時はこの山に登り雨乞いをする。

(押戸石の古拙文字)

- ・ ストンサークルの中にあるメンヒルの一つで、碑文石。
- ・ 高さ2メートル巾3メートル程の石南面にシュメール系の古拙文字が見られる。
右肩から（太陽の女神）（蛇神）聖なる牛 武の神(王)を表し、そしてその上部に(神)がある。
- ・ 太陽の女神は、日本では、天照大神蛇を神と奉としたのは、三輪山の大社神社(みわ)であり、出雲や諏訪の大神も蛇を神と尊ぶ。
- ・ 日本の神話に、やまたのオロチ退治があるがこの事は(スサノウノ命)である。スサノウノ命は別名「牛頭大王」(ゴズ)と言われ八坂神社の祭神である。その祭は砥園祭である。又オリエントでも牛神を(ゴズ)と言う。この五神を奉る御宮は琴平神社で、海洋神を奉る。
- ・ この巨石の配列にも注目したい、人為的に造詣されたものだろうか。
- ・ 古代のロマンを作り出す、聖なる山である。